

陳舜臣さんを語る会通信

NO.103 May. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2023年5月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

104の中国由来名言・名句『弥縫録』^{びほうろく}

本号では、『弥縫録—中国名言集—』（1980 読売新聞社）を紹介します。初出は、『週刊読売』、1978年4月16日号～1980年5月25日号、104回の連載です。なお、1986年、中央公論新社から文庫版が出版されています。下記の文章は文庫版のキャッチコピーです。

「弥縫」にはじまり「有終の美」にいたる身近な104の名言・名句が開示する本来の意味。ことばと人間の叡智を知る楽しさがあふれる珠玉の文集。

(編集委員 橋雄三)

『弥縫録』の巻頭は「弥縫」です
抜粋引用します
小見出し及び傍線は編集委員の加筆

「弥縫」の意味と本書の題名について

「弥縫」から抜粋引用します。

日本語では「弥縫」と「備忘」は発音がよく似ている。前者はビボウ、後者はビボウである。

「弥」も「縫」も、「ぬい合わせる」という意味なのだ。二字あわせて、「とりつくりう」だが、この弥縫の語感はいまよりよくない。一時しのぎのごまかし、というかんじがする。

鎧をつけた平清盛は、息子の重盛がやって来たので、あわてて法衣をそのうえから着こんでごまかそうとした。かき合わせた襟元から、鎧の端がちらとぞく。——そんなのが弥縫の一例である。

弥縫の典故は『春秋左伝』である。この書には、弥縫ということばがなくとも使われている。最初に出てくるのは桓公五年のところである。

周の天子が朝貢を怠った鄭の莊公を討伐しようとした。これは紀元前七〇七年のことであった。この戦争は、けっきょく、天子軍が大敗した。このときの鄭軍の陣構えは、「魚麗の陣」と呼ばれるものだった。

——偏を先にし、伍を後にし、伍承けて弥縫す。

と、春秋左伝にしろされている。偏とは二十五乗の戦車隊で、伍とは歩兵一分隊にあたる。戦車と戦車とのすきまを、歩兵で埋めた、ということである。

魚麗の陣とは、魚屋の店頭に、大小の魚がぎっしり詰ってならんでいる状態であるらしい。ことばをかえていえば、蟻の匍い出るすきまもない陣構えである。

これが「弥縫」だとすれば、けっして一時的なごまかしではない。きわめて計画的で、遺漏のない、慎重きわまる、みごとな布陣といわねばならない。

なにひとつ逃がさず拾いあげようとする。そのための作業が弥縫である。とすれば、なにひとつ忘れまいとしてメモを取る作業、すなわち備忘とは、発音の類似のほかに、精神的な姿勢のうえでも類似があるといえよう。

いささかこじつけの気味もあるようだが、備忘録をもじって、弥縫録としたのである。



文庫版表紙

目次（続きは次の頁）

弥縫
空中楼阁
酒は百薬の長
言多ければ事をして敗れしむ
洛陽の紙価を高める
屋下に屋を架す
危うきにおもむけ
折角と折檻(せっかん)
君子は庖厨(ほうちゅう)に遠ざかる
賞は日をこえず
用うることを土芥(どかい)のごとし
四面楚歌
柳眉を逆立つ
君子豹変
白髪三千丈
月落ち烏啼いて
左袒(さたん)
左遷(させん)
人生はただ口腹のみ
胸中の成竹
門前雀羅を張る
断袖(だんしゅう)
千人の指す所、病無くて死す
他山の石
義は過ぐすべからず
草を打って蛇を驚かす
夜郎自大
泥多ければ仏は大きい
葉落ちて根に帰る
馬鹿
一字の師
破天荒
秋波
尺短寸長
食は民の天なり

『弥縫録』目次(前頁の続き) 及び いくつかの補足

目次(前頁の続き)

東西南北の人
三十六計
割れた甕を見るな
完璧
春眠曉を覚えす
蒙塵
亡羊補牢
亡羊の歎
讀書亡羊
渾沌
五里霧中
男はみんな夫
食指がうごく
白眼
阿堵物(あとぶつ)
禅讓
細君
杞憂
宋襄の仁
一呼再諾
矛盾
推敲
羊頭狗肉
濫觴(らんしょう)
圧巻
捲土重来
醉中の趣
墨守
自家薬籠中の物
逆鱗(げきりん)
典型
破竹の勢い
深淵薄氷
壘断(ろうだん)
巧妻に拙夫
帰師はとどむる勿れ

獅子身中の虫
強弩(きやうど)の末
死灰復燃
一助
披露
杜撰(ずさん)
漁夫の利
伯樂の一顧
三紙に驢(ろ)字なし
狐は尾を濡らす
支離滅裂
池魚の災い
竜頭蛇尾
青雲の志
和光同塵
泰斗
全勝は闘わず
丹青競わず
巧を拙に蔵す
青天の霹靂
掣肘(せいちゆう)
病、膏肓(こう)に入る
人間万事塞翁が馬
背水の陣
狼子野心
焦尾の宴
虎穴に入らずんば
虎子を得ず
曲学阿世
鶏肋(けいろく)
画竜点睛
虎視眈眈
一衣帯水
有終の美

「青天の霹靂」

「青天の霹靂」、南宋の陸游の詩についての記述の枝葉末節に触れます。抜粋引用します。

(同じ意味でも)疾雷ではないのであって、どうしても「霹靂」としてもらわねばならないのである。現在の中国語では、この二字は Pī lì (ピー・リー)と発音する。古代音では Pek lek であり、日本語読みのほうに古音がのこっている傾向がある。冒頭の P 音は破裂音であり、それを K という強い音でしめくり、さらに L ではじまり K 音で終わることばをかさねる。これは、いかにも雷が突然鳴りはじめたかんじがする。

いままで、どの先生も、唐詩を読まれるとき、現在の普通話の発音なので、違和感があつた。右の陳舜臣さんの文章を見て、南宋でも古代音とおっしゃっているのだから、やはり、唐詩を現代中国語で発音するのはおかしいのではないか？



単行本表紙

『弥縫録』の巻末は「有終の美」です。抜粋引用します

傍線は編集委員の加筆

【易経】の六十四卦のなかの ䷏ は、「地山謙」と呼ばれる。高い山なのに、低い

地面にるようにみせる謙虚さをあらわすという。この卦の解釈は、

—— 謙は亨る、君子有終、吉。となっている。謙虚、謙遜、

謙譲は美德であつて、それでもつて世の中をスイスイとまかり通ることができ、「有終」つまり終りを全うしようというのだ。これが「吉」であるのはいうまでもない。

もちろんスタートも重要であるが、ゴールにはいらないければなんにもならない。みごとにゴール・インであることを「有終の美」という。

君子というものは、みごとにしめくりをする。いや、事業や人生をみごとにしめくることができる者だけが、「君子」と呼ばれる資格があるとも解釈できる。

「有終」はたやすいことではない。たやすければ、世の中、君子だらけになる。君子というのは、一種のまれびとなのだ。

【詩経】の大雅に、

—— 靡不有初、鮮克有終。という句がある。

—— 初、有らざるることなし、克く終有ること鮮し。

と読む。

有らざるることなし、という二重否定は「有る」ことにほかならない。

スタートはたいがいみごとなものだが、みごとにゴール・インはまれである。—— これがこの句の意味なのだ。

どんな仕事でも、すくなくともそれをはじめようとする意思がある。だから、はじめは熱気がこめられている。創業の気迫は、人びとの心をうつ。国家でもそうである。建国当初、あるいは革命当初の意気込みは、こまごましたトラブルを、フルドーザーのように碎き潰して行く。けれども、そのうちに、だんだんと困難にたいする克服意欲が薄れて行くようになる。解決されないトラブルが多く、いやになって、なげやりになることもあるだろう。じっさいに、なげてしまうこともある。ゴール・インしないのだ。

【易経】の卦はじつに深い意味をもっている。

有終の美を飾る秘訣は「謙」

にありと教えているのだ。

『弥縫録』いくつかの補足(続)

連載100回目「鶏肋」

「鶏肋」から引用します。

おなじみ三国志の時代、ときは建安二十四年(二一九)三月、曹操は劉備と漢中で戦った。曹操軍の前線は陽平に達した。劉備は要害の地に拠って防ぎ、曹軍は苦戦し、進むこ

とができない。五月になって、曹操はあきらめて軍をひいて長安に帰った。このとき曹操は、

「ここは鶏肋じゃ」

と言っただけである。それがなんのことであるか、誰にもわからなかったが、主簿(書記)の楊修だけは、さつさと帰り支度をはじめた。僚友にそのわけをきかれた彼は、

「鶏のアバラは食べるほどの肉はついているよ」と、絵解きをした。

■陳舜臣さんは、この話が好きだ。『弥縫録』にあるが、「自家薬籠中の物」といえる。陳作品、つい先だつても、鶏肋についての記述を読んだが、作品名が思い出せない。見つければ、ここの記述に追加します。

連載100

陳舜臣

弥縫録(中国の名言)

え・鴨居玲

鶏肋

鶏は人間の生活に近い鳥はないだろう。鶏が羽をもちながらうまく飛べないのは、人間による長い歳月にわたる家畜化のせいかもしれない。その肉を食べ、卵を食べ、目覚し時計のかわりにまでする、といった工合である。天照大神が天の岩戸にかくれて、天地が暗くなったときなどは、鶏が召集されることになった。夜明けを告げるからである。

鶏肉のことを関西ではカシワというが、これは関東では通用しない。カシワとして食べたあとのガラも、ダシをとるために用いる。中華料理では鶏の足のさきまで食べる。しかも、それは高級料理に属するのだ。

おなじみ三国志の時代、ときは建安二十四年(二一九)三月、曹操は劉備と漢中で戦った。曹操軍の前線は陽平に達した。劉備は要害の地に拠って防ぎ、曹軍は苦戦し、進むことができない。五月になって、曹操はあきらめて軍をひいて長安に帰った。損害が多かったのである。このとき曹操は、

「ここは鶏肋じゃ」

と言っただけである。それがなんのことであるか、誰にもわからなかったが、主簿(書記)の楊修だけは、さつさと帰り支度をはじめた。僚友にそのわけをきかれた彼は、

このように、楊修はちよつとしたヒントでも、たちまち全体を悟る人物であった。けれども、このオチぶりが曹操にはうとましく思えたらしい。

鶏肋絵師自画像



である。

この漢中戦のあった年、曹操は楊修をとらえて殺してしまふ。オチでもあり、策士でもあった楊修をこのままにしておいては、後継問題が紛糾して、曹家の覇業が崩壊するのをそなたのにちがいない。

「鶏肋」というヒントがわかつて、わからないふりをしていたはうがよかったのだ。そうすれば、曹操も、「この男はたいしたことはやれない」と、安心したであろう。楊修は殺されずにすむこともできたはずだ。クイズの名人は、くれぐれも気をつけたほうがよい。

明の張鼎は学者として知られ、みずから自在先生と称していたが、あるとき「鶏肋」とすべきところを、「鶏肘」とまちがえた。世人は彼のことを「鶏肘博士」と呼んだ。知ったかぶりのなま半可のことである。

『鶏肋集』とか『鶏肋編』といった本が宋代に出た。これは、たいした内容のものではないが、かといって棄てるのも惜しい。ダシガラにでも役立てばしあわせである、という著者の謙虚さからの命名であった。そんな書名はつけても、著者はひそかに、「鶏肋どころか、たつぷり肉がついているぞ」と、自信をもっていたかもしれない。

『弥縫録』の初出は、『週刊読売』で、1978年4月16日号～1980年5月25日号、104回の連載です。ここにあげた「鶏肋」は1980年4月27日号です。連載、丁度100回目です。さし絵は洋画家、鴨居玲です。鴨居玲は、ウィキペディアには、「社会や人間の闇を描いた画家です」とあります。

上の記事、絵に、「鶏肋絵師自画像」とありますから、自身を、「その絵は、どうしても見たい、所蔵したいというほどのものではないが、さりとして、棄てるには惜しい」、そんな画家だということです。謙遜、自嘲の表現でしょう。

『弥縫録』 いくつかの補足(続々)

夜郎とはどんな国

『弥縫録』「夜郎自大」の夜郎国についてみていきます。

「夜郎自大」はよく知られたことばで、自らの力量を知らず尊大に振舞うたとえとして使われる。夜郎国の王が漢の広大なことを知らずに、自らを強大と誤って漢の使節に接した故事から来ています(『史記(西南夷伝)』)。

ところで、夜郎国(前27)とはどんな国だったのでしょうか。位置は中国の南西、いまの貴州省の西境あたりです。民族的には、彝族、ミャオ族の系統かといわれています。

私(橋)は、二〇一五年、中国の友人Z先生の招きで、貴州旅行をする機会を得ました。Z先生が勤める大学の貴陽郊外にできた新しいキャンパスを訪問した時のことです。



「汉」は「漢」の簡体字

土人 部落 烤鱼 火锅
といった文字が見える 食堂と思える

大学裏門すぐ 夜郎の村

「夜郎の村を案内してあげましょう」と、おっしゃる先生のことばにビックリした。「夜郎」というのは、『史記』の世界のことかと思っていたからです。

その村は、大学の裏門、すぐの所にあった。

以下、何枚かの写真で紹介いたします。



上左の写真の食堂らしき建物の横を更に進むと右のような不思議な造形が林立する場所にやってきました。Z先生は夜郎の遺跡とおっしゃるが、見たところ、そう古いものではなく、そうだったので、帰国して調べると、

在貴州有一位痴迷古夜郎國文化的石匠，他花了20年時間，用盡畢生的積蓄，以古夜郎國為藍本，建成了一座奇幻的石頭城堡——夜郎谷

とあった。古夜郎国の文化に憑かれた一人の貴州の石工がライフワークとして、20年を費やしてつくりだした造形なのだ。そして、このあたりが、夜郎谷と呼ばれていることがわかる。つまり、ここが夜郎国のあった地だと信じられているのだ。

「巧妻に拙夫」

「巧妻に拙夫」から抜粋引用します。

駿馬は毎に痴漢を駄せて走り
巧妻は常に拙夫を伴いて眠る

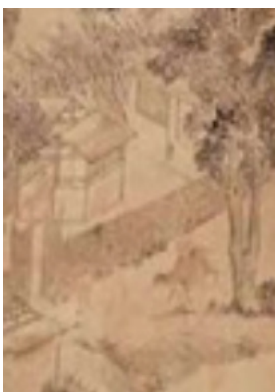
すばらしい名馬は、たいていあまり利口でない人間をのせている。いい女の亭主にかぎって、まずいろいろでなしが多い。

これは、明の中葉、「呉(蘇州)の四才子」と、もてはやされた唐寅の詩の二句です。唐寅は『中国画人伝』にも登場し、冒頭、

短編小説のなかに、私は唐寅を登場させたことがある。しかし、唐寅のことは、いつか長い小説にまでもにかきたいと思って、大切にとってあるのだ。

と、記されています。唐寅は、陳舜臣さん思い入れの人物なのです。

ところで、「短編小説のなかに、私は唐寅を登場させたことがある」は『漢古印縁起』『日本早春図』です。



『中国画人伝』掲載、「江山驟雨図」